

# 自閉症児の三項関係の成立過程

—— シャボン玉を用いた介入の効果の検討 ——<sup>1</sup>

高橋香奈子<sup>2</sup>・藤木大介<sup>3</sup>

## 要 旨

三項関係、つまり「自分」「他者」「対象」の三項の関係で対象に対する注意を自分と他者が共有することによってできる関係は、通常生後約9～10ヶ月頃に成立する。しかし、自閉症児は三項関係の成立が困難である。そのため、三項関係の成立後に獲得される心の理論（他者の心の状態を推測する能力）も獲得されにくく、他者とのコミュニケーションにも困難を覚える。したがって三項関係を結べるようになるための援助の方法を考えることは重要である。そこで、自閉症児（最重度、中度、軽度）3名に対し、シャボン玉遊びを通し、対象児の遊びのペースにあわせて向かいあいながら笑いあい見つけあうといった他者を意識できるような介入を行い、三項関係が成立できるか検討した。この際、自閉症児がシャボン玉を見た後に介入者に対して、「シャボン玉がきれいだね」や「シャボン玉が割れたね」等といった自分の感情を共有してほしいという共有確認行動が起こった場合に三項関係の成立とみなした。その結果、初回の介入では3名の対象児とも、ストローや容器等の物への関心の方が高かったが、介入を始めて約2ヶ月間で6回前後の介入を行った結果、3名の対象児ともに共有確認行動が見られるようになった。特に軽度の自閉症児では、相当数の共有確認行動が確認できた。したがって自閉症児にとって、他者を意識できるような意識的な介入者の関わり方が三項関係の成立に効果的であると言える。

キーワード：自閉症、心の理論、三項関係

## 問題と目的

近年、発達障害児が増えていると言われている。発達障害児は保育者や教師が笑いかけても何も反応をしなかったり、保育者や教師の指導が伝わりにくかったりすることが多い。そのため、保育者や教師にとって「手のかかる子ども」と思われてしまう場合がある。しかし、障害のあるなしだけでなく人間は本来多様であり、人種、宗教、性別、年齢、生活環境、性格、価値観等様々である。そのため、障害のあるなしだけで区別するのはナンセンスである。障害のあるなし

1 本論文は第1著者（高橋香奈子）が第2著者（藤木大介）の指導のもとで執筆し、平成22年度卒業論文として梅光学院大学子ども学部提出したものに若干の改変を加えたものである。

2 梅光学院大学子ども学部子ども未来学科

3 梅光学院大学子ども学部

に関わらず全ての子どもはたくさんの可能性を秘めており、子どもは子どもに変わりがない。保育者や教師はどの子どもにも適切な援助をすべきである。そして、子どもたちは保育者や教師の援助の下、障害のない子どもと障害のある子どもとが共に生活したり、学習したりすることで、互いのことを理解し、人間の多様性に気づき、そのことがそれぞれの心の育ちに大きな影響を与えると考えられる。また、このような障害のある子どもとない子どもとの関わり合いの場を設けるためには、保育者や教師が障害に対する理解や知識を深め、その援助の方法も知っていることが大切である。

しかしながら、特に自閉症児は集団内での活動を促すのに困難さを覚えることが多い。その理由は、自閉症という障害には対人関係が結びにくい、強いこだわりを持つ、人と目を合わせようとしない、コミュニケーションをうまくとることができない、相手の感情がわからない等といった特徴がある(佐々木, 2006)からであろう。また、このような特徴が見られる1つの原因として「心の理論」、つまり、他者の心の状態を推測する能力が獲得できないことが挙げられている。それでは、自閉症児の心の理論獲得のために保育者や教師はどのような援助ができるのだろうか。

心の理論の獲得過程について熊谷(2004)は、4つの発達段階からなるモデルを構築し、説明した。まず、段階Ⅰは三項関係の成立である。三項関係とは「自分」「他者」「対象」の三項の関係で、対象を自分と他者が共有することによってできる関係のことである。この段階では、私—他者—対象は、〈いま・ここ〉の1つの空間の中にあり、目に見えないものは三項関係のやりとりの中では出てこない。この三項関係が成立した後の段階Ⅱでは、〈いま・ここ〉にない物や人、出来事を言語を用いて伝えるようになり、そのため、「あっちに～があった」「あそこに～がいた」「また～した」「今度～する」等の過去や未来の出来事を伝達できるようになる。また、過去や未来の出来事を展望する中で、段階Ⅲとして、私と他者の活動の違いが区別されるようになり、その異なる経験内容を伝達しあうために、行為者、対象、時、所、理由などを特定化した客観的な活動表象(だれ、なに、どこ、いつ、なぜ)を使うようになる。さらに、私と他者との活動や経験の違いが理解される中で、段階Ⅳとして、〈彼/彼女〉のような3人称的人物の主體的立場をナラティブ標識(しかし、だから、来る、見る等)を使いながら理解できるようになる。

しかしながら、自閉症児はこの段階Ⅰにあたる三項関係を結ぶことが困難である。三項関係の成立は心の理論を獲得するための前提条件であり(熊谷, 2004)、また、三項関係は人と人とがコミュニケーションをとる上での基礎とも言われている(別府, 2005)。三項関係は、私—他者の関係、例えば、赤ちゃん(私)とお母さん(他者)が笑いあったり、見つめあったりするといった二項関係と、私—対象の関係、例えば、赤ちゃん(私)がボール(対象)を手にとって遊ぶといった二項関係を結合して成立するものである。つまり、赤ちゃん(私)がお母さん(他者)にボール(対象)を転がして、またお母さんも受け取ったボールを赤ちゃんに転がしあうといった私—他者—対象の三項のやりとりを三項関係と言う。この三項関係の中から、赤ちゃん(私)とお母さん(他者)がボール(対象)遊びをする中で、笑いあったり、ボールを投げるタイミングを計る時に目を見つめあったりすること等が生まれる。

また、この三項関係の成立には共同注意が必要とされる。共同注意とは、視線や指差し等を使って他者と対象を共有することである。別府（1996）は自閉症児でもこの共同注意ができるかを検討した。この研究では健常児と自閉症児に対してシャボン玉遊びをしながら後方向の指差しを行い、その反応を「反応がないレベル」「指のみを見るレベル」「指をさした対象を見るレベル」「対象を共有したことを実験者に確認する行動が見られるレベル」の4つに分けた。その結果、健常児では1歳1ヶ月以降になると指をさした対象を見ることができるようになり、また、その中の約半数が指した対象を共有したことを実験者に伝え返し確認するという共有確認を行うレベルとなった。しかし、自閉症児（生活年齢3歳5ヶ月から6歳6ヶ月）では、発達年齢が1歳1ヶ月頃になると指をさされた対象を見るレベルまでは可能になったものの、それ以上に発達年齢が上がってもほぼ全員が共有確認のレベルには至らなかった。

以上をまとめると、自閉症児は三項関係の成立の過程で困難さを示すと言える。より詳細には、ある程度の発達年齢になると、指した対象を見るなどのレベルの共同注意は可能になることが多いが、対象を見た後、他者に自分の感情を伝えようとする共有確認行動ができるようになることはほとんどないと言える。

しかし、適切な介入を行うことで三項関係を結ぶことが可能となることを示した研究もある。辻・高山（2004）は、発達年齢が1歳5ヶ月（生活年齢3歳2ヶ月）となる自閉症児1名に対し、母親が他者を意識できるような遊びを展開していった。その結果、自閉症児が行為主体としての母親を認識できるようになり、その後の日常生活の中で対象児から進んで人と関わりをもとうとする行動がしばしば観察されるようになったと報告している。

この介入では、対象児との三項関係を成立させる「対象」としてシャボン玉を使用し、遊びを通しての介入を行った。シャボン玉を用いた理由は、対象児がこの玩具に一番笑顔を示し、なおかつ他者と対面して取り組めるという利点があったからである。この対象児は、介入前はシャボン玉を吹く母親を見るのではなく、シャボン玉を吹くストローの先端や容器、シャボン玉を見ることが多く、物への関心の方が高かった。しかし、見つめあい、笑いあいのやりとりや、対象児の行動を真似たりと、他者を意識できるような関わりをすることで最終的に母親に笑いかけたり母親を見たりする回数が増えた。このことから、辻・高山（2004）は、シャボン玉での介入により母親（人）という存在を意識し、自分—対象—母親との三項関係が成立できたとした。この辻・高山（2004）にしたがうならば、他者を意識できるような遊びの展開でのシャボン玉による介入は、自閉症児にとって三項関係を結ぶ効果的な方法である可能性がある。

この辻・高山（2004）の介入方法は、特別支援の現場で言葉の発達が遅れている子どもに対して用いられているインリアルアプローチ（例えば、竹田・里見，1994）と類似している。かつては言葉を獲得しさえすれば、人とのコミュニケーションが可能になると考えられていた。そのため、言語を獲得することが第一の目標になっていた。しかし、現在では、言語とコミュニケーションの捉え方が変化し、子どもは言語を獲得してからコミュニケーションについて学ぶのではなく、生まれてすぐに始まる他者との相互作用を通じて、コミュニケーションの方法やルールを学び始めると考えられるようになってきている。このような考えに基づき、インリアルアプロー

チでは、子どもはまずコミュニケーションを学び、そのプロセスの中に言語獲得が含まれると考える。そのため、子どもが遊びの主導権をもてるような子どもに合わせた関わり方を介入者がしていくことが前提である。またその結果として、他者を認識できるようになると言われている。このように、特別支援の現場では辻・高山（2004）と類似の介入方法が取り入れられており、またそのような介入方法はコミュニケーション能力の促進という点で効果的な方法だと経験的にわかっているのだろう。

しかし、この辻・高山（2004）の介入の報告には4つの課題が残されている。1つ目に、対象児が1人しかいない。そのため、偶然その対象児に介入方法が適していただけで、他の自閉症児に同じ介入方法を行ってもシャボン玉を吹いている人物を認識できるようになったり、その後の日常生活の中で進んで人と関わりをもとうとする行動がとれるようになったりするかは不明である。2つ目に、障害の程度や発達年齢の違いによって介入の効果に違いがあるのかが不明である。つまり、いかなる自閉症児でも効果が認められるのか、障害の程度が軽ければ介入の効果がみられるのか、あるいはある程度の発達年齢になると介入の効果がみられるのか等が不明である。3つ目に、何をもちて三項関係が成立したとするかの基準が不明である。辻・高山（2004）では母親への笑いかけや母親を見る回数が増えたことが報告されているが、それが自閉症児単独の感情の表現なのか、母親との感情の共有の要求なのかははっきりしない。4つ目に、介入者が母親以外であっても介入の効果があるのかが不明である。

そこで本研究では、辻・高山（2004）の介入方法の効果を検証するため、辻・高山（2004）の方法を踏襲しつつ、以下の変更を加える。まず、対象児を1名ではなく3名とする。次に、障害の程度が最重度、中度、軽度の3名の対象児を比較することによって介入の効果が障害の程度によって違いがあるのかを検証する。さらに、三項関係の成立の基準を明確にする。具体的には、別府（1996）の後方向の指差しのレベルを参考に、三項関係の成立過程を「反応がないレベル」「指を見るレベル」「指差した対象を見るレベル」「対象を見た後、他者と笑ったり、言葉を交わしたりする共有確認行動が見られるレベル」に分け、この共有確認行動が見られるレベルを三項関係が成立したと定義する。つまり、「私はあなたが伝えたものを確かに見たよ」というような、対象を共有したことを実験者に伝え返して確認する行動が見られた場合、共有確認行動であると判断する（別府、1996）ということである。そして、介入者は母親ではなく、第三者的な立場である著者とする。以上により、自閉症児に対するシャボン玉を用いた介入によって自閉症児が三項関係を結ぶことができるようになるのかを検討する。

## 方法

### 対象児

障害児通園施設に通う障害の程度の異なる3名の自閉症児（A児、B児、C児）であった。

A児（女兒）は介入開始時期の暦年齢は5歳1ヶ月であった。児童相談所の診断結果から、自閉症最重度と診断されており、生活年齢が5歳3ヶ月の際、精神年齢が1歳0ヶ月とされてい

る。また、暦年齢4歳11ヶ月時に行われた遠城寺式乳幼児発達検査によると、「対人関係」が1歳4ヶ月から1歳6ヶ月相当、「発語」が0歳6ヶ月から0歳7ヶ月相当、「言語理解」が0歳10ヶ月から0歳11ヶ月相当とされている。普段の様子としては、大人からの関わりがないと玩具に興味を示さず、ロッカーの戸を開け閉めして過ごすことが多い状態である。また、要求は声を出しながら、手を伸ばす、指差しをする、保育者の手を動かす等、動作と音声で伝える。

次に、B児（男児）は介入開始時期の暦年齢は4歳6ヶ月であった。自閉症中度と診断されており、生活年齢が4歳2ヶ月の際、精神年齢が1歳9ヶ月であった。また、暦年齢4歳4ヶ月時に行われた遠城寺式乳幼児発達検査によると、「対人関係」が1歳4ヶ月から1歳6ヶ月相当、「発語」が1歳6ヶ月から1歳9ヶ月相当、「言語理解」が1歳0ヶ月から1歳2ヶ月相当とされている。普段の様子としては、音の出る玩具や絵本を見て1人で楽しんでおり、同年齢の子どもに対しては興味・関心は薄いですが、大人に対しては単語やクレーン行動、つまりなにか取ってほしい物がある時に相手に訴えるのではなく、相手の腕をつかんで取ってほしい物の方へ導くといった行動が見られる。

最後に、C児（男児）は介入開始時期の暦年齢は5歳2ヶ月であった。自閉症軽度と診断されており、生活年齢が4歳5ヶ月の際、精神年齢が2歳6ヶ月であった。また、暦年齢5歳0ヶ月時に行われた遠城寺式乳幼児発達検査によると、「対人関係」が1歳9ヶ月から2歳0ヶ月程度、「発語」が1歳9ヶ月から2歳0ヶ月程度、「言語理解」が2歳0ヶ月から2歳3ヶ月程度とされている。普段の様子としては、遊びは1人遊び中心だが、砂遊び等で友達の真似をしたり、追いかけて一緒に走ったりして遊ぶ様子が見られる。

なお、対象児らが通うこの施設の特徴としては、ポータープログラム（発達に遅れや偏りのある子どもについて、なるべく早い時期に早期教育を行って効果をあげようというプログラム）をはじめ各種プログラムや技法による客観的な分析と支援を行っている。また本研究を実施した年から、一部の園児に対してインリアルアプローチを取り入れている。

## 介入の手続き

辻・高山（2004）と同様、自閉症児とのやりとりを可能にするものとしてシャボン玉を用いることとした。シャボン玉の介入は著者が行い、シャボン玉遊びの中でのやりとりがどのように変化していくかを記録した。対象児がシャボン玉を要求しなくなったら、シャボン玉の介入は終了した。このシャボン玉を用いた介入を週に1回、計8回行い、ビデオに録画する計画であった。しかし、実際には、保育活動に支障が出ないように介入を行ったため、A児が計6回、B児が計5回、C児が計7回の介入となった。また、全対象児合計18回のやりとりは、全て室内で行った。そして、部屋の中で、対象児が他の物に注意を向けず、集中してシャボン玉のやりとりができるように、部屋の中に置いてある机や椅子、ごみ箱等を取り除き、刺激を少なくした。

関わり方の留意点としては、辻・高山（2004）の研究を参考に、シャボン玉への期待感が高まるようにしながら楽しいやりとりを展開していくこと、見つめあい、笑いあいのやりとりをすること、対象児の動作を模倣することなど、対象児が介入者の存在を意識できるような関わり方を

展開していった。そのため、シャボン玉のやりとりを行う際は介入者と対象児の目と目があいやすいよう、なるべく向かいあってシャボン玉遊びができるように心がけた。しかし、対象児のペースに合わせて介入を行ったため、座ってシャボン玉を吹きあったり、横に並んでシャボン玉を吹きあったり、シャボン玉と一緒に部屋の中で追いかけたりと、各回によってシャボン玉遊びの状況は異なることもあった。また、介入を行った部屋には大きな窓があるため、全対象児とも窓の外に向かってシャボン玉を吹く場合もあった。

なお、普段の対象児の様子を知るために、シャボン玉の介入以外での自由遊び場面やグループ活動などの日々の保育の中でも、重点的に3人と関わりをもった。

### 後方向の指差しのレベルの確認の手続き

介入の初回に対象児それぞれが別府（1996）の共同注意の反応のレベル「反応がない」「指を見る」「指差した対象を見る」「対象を見た後、他者と笑ったり、言葉を交わしたりする共有確認行動が見られる」のいずれにあたるか確認した。その結果、3名とも「指をさした対象を見る」のレベルまではできていたが、共有確認行動は見られなかった。そこで、2回目以降の介入では共有確認行動が現れるか否かを重点的に観察することとした。

### 分析方法

介入場面を録画したビデオを見ながら対象児の行動を全て書き出し、辻・高山（2004）を参考に、その行動が物へ向けられたものであったか、人へ向けられたものであったかを分類した。容器を見る、シャボン玉に手を近づける、ストローを口につけて吸う等は物へ向けられた行動として物へのアクションと分類した。また、介入者を見る、介入者に笑いかける等は人へ向けられた行動として人へのアクションと分類した。そして、そのどちらにも当てはまらない場合はその他と分類した。これらの行動が起こるごとに、1回のアクションとカウントした。なお、共有確認の基準は、第1著者と第2著者とでビデオを視聴しながら話し合い、基準を決めた後、それ以降はこの基準にしたがって第1著者の判断で共有確認行動か否かを決定した。

## 結果と考察

### 介入ごとの物や人へのアクションや共有確認の回数の変化

対象児の行動について、物へのアクション、人へのアクション、その他のアクションについて分類した結果を表1に示した。全体的に見ると、物へのアクションが大半で、人へのアクションは少ないことが見て取れる。また、共有確認行動は介入前半（6月30日から7月21日）では、C児に1回見られた程度だったが、後半（8月4日から8月31日）は3名ともに共有確認行動が出るという結果となった。

表1 各介入日の対象児ごとの物や人へのアクションの頻度（割合）、共有確認行動の回数（回）、および観察時間（分）

介入日	A			B			C		
	物/人/他	共有確認	観察時間	物/人/他	共有確認	観察時間	物/人/他	共有確認	観察時間
6月30日	.58/.19/.23	0	10	.51/.16/.33	0	7	.73/.16/.11	0	8
7月7日	.64/.23/.13	0	7	.59/.22/.19	0	7	.75/.16/.09	0	10
7月21日	.65/.25/.10	0	13	.66/.18/.16	0	6	.79/.18/.03	1	9
8月4日	.71/.23/.06	0	7				.75/.20/.05	2	11
8月18日	.54/.36/.10	2	11	.65/.21/.14	1	10	.72/.26/.02	1	11
8月25日	.52/.28/.20	1	11	.60/.25/.15	1	11	.66/.27/.07	30	16
8月31日							.65/.32/.03	12	6

「物」は物へのアクション, 「人」は人へのアクション, 「他」はその他を表す。

**A児への介入について** 表1から、障害の程度が重度のA児においては、介入の回を重ねるごとに人へのアクションが増える傾向が見て取れる。

A児は介入当初の6月30日や7月7日は、シャボン玉の介入自体は楽しんでいる様子で、シャボン玉を見たり、触ったり、ストローを触ったり、またシャボン玉を見て喜んだり、シャボン玉が割れると介入者を見て笑うのではなくA児自身の中で笑って楽しんでいるように見え、介入者を見たり笑いかけたりする時間は少なかった。また、介入者がシャボン玉を吹かずA児の反応を待っていると、A児が介入者の手を持ちストローを液につけたり、「あっ」と介入者の手を指差して介入者にシャボン玉を吹くように呼びかけたりといった、クレーン行動が見られた。そして、回を重ねるごとにだんだんとシャボン玉遊びに飽きてきた様子が見られた。さらに、8月4日の介入ではA児の体調も関係してか、物への関心が高くなった。また、この日を境にそれ以降はシャボン玉を自分から触ったり、見たりして楽しむ様子は減少した。

このようにシャボン玉遊びへの関心は低くなっていったが、シャボン玉遊びを通しての介入者との関わりは変化していった。その変化とは、介入当初の6月30日や7月7日では介入者が飛んでいるシャボン玉を指差したり言葉かけをしたりしなくてもA児自らが進んでシャボン玉を見たり触ったりしていたのだが、8月4日以降、介入者の指差しや言葉かけによってシャボン玉を見たり触ったりする場面が増えるというものであった。つまり、シャボン玉を見るにしても触るにしても、人を通してのシャボン玉遊びへと変化していったということである。例えば8月18日では、介入者の顔を見て笑いかけたり、なかなかシャボン玉が出なくて困った顔をしている介入者を見て笑いかけてきたりと、わずかではあるが共有確認が見られた。また、介入の最終日である8月25日では、A児を抱っこしてシャボン玉を吹くという方法も取り入れてみたが、大人から抱っこをしてもらうのが好きなA児は、介入途中で介入者を見て笑いかけたり、じっと見つめたりする様子も見られた。

**B児への介入について** 表1から、障害の程度が中度のB児においても回を重ねるごとに人へのアクションが増え、人への関心が上昇傾向にある。ただし、物への関心が初回に比べると一

時的に高くなっている時期もあることがわかる。

介入当初の6月30日と7月7日では介入者が吹くシャボン玉を見たり、触ったりしていて、直接B児がシャボン玉を吹くことはほとんどなかった。また、7月21日は物へのアクションが多く見られる。このことから、物への関心が高くなっていることがわかる。その理由は、シャボン玉を見たり触ったりするのではなく、シャボン玉を自分で吹くことが楽しくなり、介入者との関わりというより、自分1人でシャボン玉を吹いて飛ばして割ってという楽しみ方にだんだん変化していったからだと考えられる。

B児が介入者を意識できるシャボン玉遊びを成り立たせるため、8月18日、8月25日では、介入者自身になるべくB児と一緒にシャボン玉を吹いたり、シャボン玉を吹く時に吹きやすいように「いち、にのふー」という言葉かけをしたり等、意識して介入するように特に心がけた。その結果、ほんの一瞬ではあったが、8月18日と8月25日に1回ずつ共有確認が見られた。自分の感情を伝えようとする共有確認行動は他の対象児に比べて少なかったが、自分の世界に入り込んでしまいシャボン玉のやりとりがうまくできなかったB児が介入者の顔を長く見るようになったり、介入者の顔を見る回数が増えたり等、人へのアクションが増加した。このことは、初回より他者認識の度合いが高くなったことを示していると考えられる。

C児への介入について 表1から、障害の程度が軽度のC児においても回を重ねるごとに人への関心が上昇しており、物への関心は初回の介入時に比べるとだんだんと減少傾向にあることがわかる。また、共有確認行動が増え始めたことを機に、物へのアクションが減少してきていることもわかる。この傾向はA児、B児と比べ、より顕著なものであった。

介入初回の6月30日では、他の対象児とは違い、C児は介入者がシャボン玉を吹く様子を見ることなく、はじめからシャボン玉を吹くことができていた。そのため、どの対象児に比べても、物へのアクションが高かった。7月7日から、飛んでいるシャボン玉をストローで捕まえるというシャボン玉の遊びをC児が見つけたため、介入者もC児と同じ遊び方を取り入れてみた。しかし、C児と同じ遊びをして積極的に関わりをもとめようとするが人への関心が変化していない。これはC児の捕まえたシャボン玉を見たり、同じようにシャボン玉を捕まえたりするのだが、そこでの笑いあいのやりとりはほとんど見られないことから、介入者の存在をあまり意識できていなかったのではないかと考えられる。

しかし、7月21日に介入者が捕まえたシャボン玉をC児に渡すという遊びを介入者が見つけたこと、これを意識して実践したことで、6月30日や7月7日に比べて、人へのアクションが増加しており、人への関心が高くなっていることがわかる。また、この頃から、日常生活場面で介入者の顔を見ると「シャボン玉」とC児から声をかけてくれることが多く見られた。さらに、7月21日以降から共有確認行動が少しずつ見られるようになった。介入当初は、1人でシャボン玉を飛ばして遊ぶことが楽しいと感じていたC児だが、介入者との関わりを積極的に増やすことによって、シャボン玉を吹いて、捕まえて、その捕まえたシャボン玉を相手にパスをするといった遊びの流れが楽しくなったのではないかと考えられる。この傾向は顕著で、8月25日にはさらに多くの共有確認行動が出現している。これはC児がシャボン玉を吹く際にシャボン玉が出



ても出なくても毎回「あっ、おいしい!」とか「いっぱい出たね!」という言葉かけを続けていたからだと考えられる。C児の反応がなくても言葉かけを続けることにより、吹けなくても何らかの反応を相手がしてくれるという反応の楽しさを見つけだしたことから、笑いあったり、見つめあったりという共有確認が増えたと考えられる。

### 辻・高山(2004)の結果との比較

辻・高山(2004)では対象児が1人だったために、その対象児に偶然効果的な介入方法だったのか、自閉症児全般において効果的な介入方法なのか不明であった。そのため、本研究では対象人数を3人とした。その結果、全ての対象児で人へのアクションが増加し、また、全ての自閉症児から共有確認行動が出た。このことから、自閉症児全般に効果的な介入方法であると考えられる。

ただし、その効果は自閉症児の障害の程度や発達年齢によって異なる可能性も考えられる。最重度のA児や中度のB児と比較して、軽度のC児は吹くだけではなく、自分が捕まえたシャボン玉を介入者にパスしたり、介入者が吹くシャボン玉を捕まえたりするやりとりが見られた。また、三項関係についても、最重度のA児と中度のB児は、後半の介入時に1、2回共有確認が見られる程度であった。しかし、軽度のC児は、介入を続けるたびに共有確認が増え、多い時には16分のシャボン玉遊びの中で30回もの共有確認が見られた。また、その翌週でも6分のシャボン玉遊びの中で12回の共有確認が見られた。以上のことから、障害の程度や発達年齢が違ふことによって、介入の効果が異なると考えられる。辻・高山(2004)を含め、対象児の発達年齢、あるいは精神年齢は、辻・高山(2004)は1歳5ヶ月、A児は1歳0ヶ月、B児は1歳9ヶ月、C児は2歳6ヶ月であった。したがって、発達年齢や精神年齢が1歳半から2歳あたりを境に介入の効果が見られるようになるのかもしれない。また、辻・高山(2004)を含め、対象児間で用いられた発達検査が異なるので直接の比較はできないが、便宜的に発達年齢や精神年齢を生活年齢で除して100を掛け、新版K式発達検査で言うところの発達指数にあたるものを算出した。その結果、辻・高山(2004)の対象児は45、A児は19、B児は42、C児は57であった。このことから、発達指数に換算すると45を超えたあたりから効果が見られるようになるのかもしれない。

また、辻・高山(2004)では母親への笑いかけや母親を見る回数が増えたことから三項関係が成立したと報告されていた。しかし、自閉症児の単独の感情なのか、母親との感情の共有なのかははっきりしなかった。そこで本研究では三項関係の成立の基準を明確にし、対象児が笑いかけや目線を合わせる場面で、「相手に自分の感情を伝えようとしているかどうか」という観点でビデオを分析した。その結果、このようなより明確で高いレベルの三項関係の成立の基準としても、介入により三項関係が見られるようになることがわかった。

さらに、母親の介入でなくても効果が認められるかも検討したが、第三者的立場の人物の介入であっても三項関係が結ばれることが示唆された。

### 自閉症児における共有確認行動の出現の意味

本研究の結果から、シャボン玉遊びを通した介入によって、三項関係を結ぶことが困難だと言われている自閉症児3名ともに、三項関係の成立の基準と考えることができる共有確認行動が見られるようになることがわかった。ただし、先にも述べたとおり、障害の程度や発達年齢の差によって介入の効果に差があった可能性が高く、A児とB児に関しては人へのアクションは増加したが、共有確認の頻度が少ないため、シャボン玉の介入の効果とは言えないかもしれない。普段の日常生活でもまれに共有確認が見られていて、それが介入時にも観察された可能性がある。しかし、C児においては、介入の回数を重ねることで相当数の共有確認を確認できた。自閉症は心の理論が欠如していると言われているため、本研究で観察されたような、シャボン玉が出なかった時に笑いかけたら相手も笑ってくれるだろうといった他者の心の状態を読み取るような共有確認行動は出にくいはずである。このことから考えると、C児のように頻繁に共有確認が見られたということは、介入の効果を示していると言って良いであろう。

また、このような理由から、介入を重ねることによって対象児が介入者に慣れ、共有確認行動が見られるようになったという解釈は成り立たないと言える。確かに、初回のやりとりでは3児とも介入者を見る回数も少なく、人への関心は物への関心に比べると低いため、この時点では、対象児が介入者に慣れていなかったと考えられる。そして、週に1回介入を続けながらシャボン玉の介入以外での保育の活動の中でもA児、B児、C児と関わりをもった結果、介入者と対象児との間で信頼関係が結ばれかけたかもしれない。しかし、もしこのような介入者への慣れによって共有確認行動が見られるようになったのであれば、やはり、自閉症は心の理論の獲得が困難であるという考えと矛盾する。特に、C児の共有確認の回数は偶然以上のものであると考えられる。したがって、特にC児については介入の効果があったと考えることができる。

以上から、辻・高山(2004)の主張と同様、自閉症児といえども適切な介入を行えば三項関係の成立は可能だということが示せたと考えられる。ただ単に子どものペースに合わせた関わり方ではなく、見つめあったり笑いあったりと、共有確認が出やすいような関わり方を介入者が意識的に行うことで、共有確認行動を導くことができると言えよう。

### 今後の課題

今回介入を行った3人の自閉症児は母子通園施設を経て、現在の障害児通園施設に通っている。そのため、早い段階からの特別なプログラムや支援のおかげで三項関係の成立が可能になった可能性もある。また、介入を行った2ヶ月の間の施設内での個別支援計画や保育内容によって対象児が大きく学び、成長したために共有確認が増えた可能性もある。そのため、保育所や幼稚園での生活で特別な支援を受けてきていない自閉症児に同じ介入をすることで、同様の結果が得られるかについても検討すべきであろう。

また、介入の効果が現れるまでの時間も検討すべきである。今回の介入では、共有確認行動が出るまで、つまり介入の効果が現れるまでに最短でも約1ヶ月かかった。もともと対象児と信頼関係が築けていない第三者的立場の著者が介入を行ったため、介入の効果が現れるのに時間を要

した可能性がある。逆に、信頼関係を築くことができている保育者が行えばすぐに介入の効果が見られるかもしれない。この疑問を検証するためには、普段から関わりをもっている保育者に同様のシャボン玉遊びをしてもらい、短期間で共有確認行動が出るのかでないのか調べることも有意義だろう。ただし、辻・高山（2004）では介入者は信頼関係を築けていたであろう母親であったが、それでも2、3週間は介入の効果が現れるまでに時間がかかっていた。そのため、信頼関係が築けていても介入の効果が現れるまでにはある程度の時間は要すると考えられる。もちろん母親や今回の介入者である著者の介入者自身の関わり方の改善のために、介入の効果に時間がかかった可能性もないわけではない。

さらに、どの対象児も介入全体を通して物へのアクションが50%以上であった。このことは、自閉症の特徴から人への関心より物への関心の方が高いと考えられるため想定内のことであった。しかし、本研究の対象児の発達年齢と同等の生活年齢の健常児に、このようなシャボン玉のやりとりをした場合も同様の結果になるのかは不明である。あるいは、物へのアクションの率が低くなり、人へのアクションが高くなる可能性もある。したがって、健常児に対して今回の介入のようなシャボン玉遊びを行い、物へのアクションの数や人へのアクションの数を調べてみることも意義があるだろう。また、ある程度の精神年齢となれば、自閉症児でも人へのアクションが増加する可能性も考えられる。したがって、より精神年齢の高い自閉症児（者）を対象にしたシャボン玉遊びを行い、物へのアクションや人へのアクションの数を調べることも行うべきであろう。

また、シャボン玉遊び以外の介入方法についても検討すべきだろう。シャボン玉は、対象児と向き合いながらやりとりができ、その中でシャボン玉を一緒に吹いたり、目と目を合わせたりと、他者を意識しやすいものであった。こういった点で本研究のような介入で用いるには都合の良い方法であると言える。ただし、対象児1人でできるものではなく、向かいあいながらやりとりができ、なおかつシャボン玉のように吹いている「他者」という存在が意識しやすいという条件を満たす「対象」であるならば、三項関係の成立を促すことができる可能性が考えられる。今後さらに、対象児ごとにより適切な方法を見つけ、介入を行うことも考えるべきであろう。

そして、シャボン玉遊びを通しての共有確認行動が介入場面以外の日常生活場面においても共有確認行動が出るようになったのかも不明である。そのため、このような介入を行なうことで共有確認行動が日常生活場面でも見られるようになるのかも検討する必要がある。

#### 引用文献

- 別府 哲 (1996). 自閉症児におけるジョイントアテンション行動としての指差し理解の発達：健常乳幼児との比較を通して 発達心理学研究, 7(2), 128-137.
- 別府 哲 (2005). 共同注意：同じモノをみる 小安増生（編著） よくわかる認知発達とその支援 ミネルヴァ書房 pp.80-81.
- 熊谷高幸 (2004). 「心の理論」成立までの三項関係の発達に関する理論的考察：自閉症の諸症状と関連して 発達心理学研究, 15(2), 77-88.
- 佐々木正美 (2006). 自閉症のすべてがわかる本 講談社

竹田契一・里見恵子 (1994). 子どもとの豊かなコミュニケーションを築く インリアル・アプローチ  
日本文化科学社

辻あゆみ・高山佳子 (2004). 自閉症幼児における三項関係の成立過程の分析：シャボン玉遊び場面での  
やりとり 発達心理学研究, 15(3), 335-344.